天体観測

青輝　ひづき

右の羽に白い斑模様がある雀が電線を伝っていく。その先を目で追ってみると、少し離れたところにやや大きめの雀がもう一羽。いやまぁ雀の平均的な大きさなんて知らないからはっきりしたことはわからないけど、それでもその雀は大きいような気がする。貫禄というか渋みというか……とにかく立派そうな雰囲気がある。

雀に感銘受けてますよ、自分。

その雀B（実は〝大きい〟と掛けてみたり）はまったく動かず、どこか彼方を見つめていた。それにちょっとずつ距離を詰めていく雀A（斑ちゃん）。何だか少し、頬が緩くなってくる。

――

チャイムが鳴った。……あれ？

教壇の数学教師が教科書を閉じ、ついで周りの皆もノートやら筆記用具やらを片付け始める。……あれあれ？

「じゃ、今日はここまでー。今日やったところは特に重要なところだからな。しっかり復習しておくように」

そう言って先生は教室から出て行った。賑やかになりつつある周囲。

あぁ、授業終わったのか。

ぼんやりと考えながら机の上に視線を落とす。ノート上での黒と白の戦いは半端なところで止まってる。止まってる箇所と黒板に書かれた数式を見比べて、随分辻褄が合わないことを残念に思いつつ、まぁでも途中抜けてたら板書写しても意味ないかとあっさり諦めた。あとで誰かにノート見せてもらおう。

だめだなぁ、私。

のそのそと授業道具を片付け始める私に、後ろの方から声がかかる。

「やえっちーっ！」

一瞬びくっとした後、そろそろと後ろを振り返る。見れば、友達何人かが各々持参したお弁当を持って集まっていた。ちなみに彼女達との距離は机３つほど。

その中のひとりがもう一度大きな声で話しかけてくる。

「一緒に外でご飯食べないー？」

ぶんぶんと片手を振ってくれている。

あのすみません、もう片方の（お弁当を持っている）手も反動でけっこう揺れちゃってますが……。

「う、うん、ちょっと、待っ、て、」

そこではたと気付く。

あの人達も外で食べるんじゃ……？

そう考えると途端に動きが鈍重になってしまう情けない私の四肢。

いや、わかってる。別に体が脳の命令を無視してるわ

けじゃない。その命令を出すべき脳自身が、外に出ることを拒んでいるんだ。体はその命令に素直に従っているだけ。

「ご、ごめん。やっぱり今日は、外、いいや……」

結局そんな言葉が出てしまう。

小声で、しかも掠れがちの言葉だったから届いてないかと思ったけど、彼女の耳は優秀だったらしく、

「そっかー！　わかったー！」

と言って了承の念を表してくれた。そして周りの友人達と一緒に外へ。

相変わらずお日様みたいに明るい人だな、と思った。

それに引き換え、「ふぅ」というため息とともに、立ち上がりかけてた体をまた椅子に委ねる脱力しきった私。

だめだなぁ。

残っていた筆記用具を鞄のなかにしまい、何もなくなった机の上にうつ伏せになる。顔が冷たい机に触れて、今さらながらに頬が熱を持っていることに気付いた。

無性に泣きたくなってくる。なんていう感情なんだろうな、これ。

悲しみ？　怒り？　羨望、嫉妬？

どれもどこか違う気がする。うまく言葉にできない。気持ち悪い、据わりが悪い、もどかしい。

いや、別にわざわざわかりやすい表現にする必要もないのかも。この気持ちはこの気持ち。ぐるぐるってしてもやもやっとしつつどよーんてなってる、この気持ち。

なんか抽象的にしてみると救いようのない、だめだめな感情のような気がしてきた。これは胸に抱いていて良いもの？　悪いもの？

ねぇ、教えてよ、村山くん……。

自分の体でつくった暗闇から、快晴の外に向けて顔を動かす。

あの電線に雀Ｂの姿は見えず、羽に雪化粧をした小さな雀が一羽佇むのみだった。

あの話を最初に聞いたのは誰からだっけ？　よく覚えてない。誰から、とかじゃなくてその話自体がとんでもないサプライズだったから。それに付随して聞いた一切の情報が頭に入らなかったくらい。

『村山くんが付き合い始めたらしいよ』

確かにこれには驚いた。

片想いの相手に恋人ができたんですよ？　そりゃ誰だってショックを受けますって。

でもこれはほんの序の口。ボクシングで言えば様子見のジャブぐらいのものだったらしい。

そこで、憐れな私は傷心の身にて失恋の痛みに胸をしくしくさせつつ泣き暮らす日々に若き身空を投じたのでした合掌、と終わっていれば話は（悲しいですが）簡単

に済んでいたのでしょう。
しかし何を血迷ったのか――きっとショックのあまり気が触れかけていたのでしょう、そうに違いありません――私はその相手を聞いてしまったのです。
『それがすごいの！　なんと＊＊さんなんだって！』
ストレートが来ました。いや、ひょっとしたら脳震盪狙いの極上アッパーだったのかもしれません。
どうでもいいのです、そんなことは。
とにかく衝撃を受けたのです。しばらく呼吸することも忘れてしまいました。卒倒しなかったのは私に度胸があったからでは断じてなく、ただただ呆然とするより他なかったからなのです。
よりにもよって、よりにもよって＊＊さんとは！
いえ、ここでしっかり確認しておきたいのですが、別に彼女のことが嫌いだったわけでも疎ましく思っていたわけでもないのです。
ただ、意外だったのです。ひどく意外だったのです。
無論彼女は（いやな言い方ですが）「不細工」と言われるほどひどい容姿をしていたわけではありません。逆に美人と称すほどの容姿でもなかったわけですが、それはともかく。
問題、というか気になるところといえば、むしろその性格の方でした。
人と「ズレて」いる、といえばいいのでしょうか。よく言えば「明るい」のですが、それが空回り気味で周りの皆がついていけない。人を引っ張っていく力を持っていても、引っ張っていく方向は自分の気分次第。気配りや他人への配慮という言葉を微塵も感じさせない。そんな人だったのです。
あまり自分から積極的に行動する方ではない私は、たびたび彼女に引っ張り回されていました。いや過去形じゃないんですが。
そんな彼女と村山くん。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能、料理上手。人に対するさまざまな褒め言葉のほぼすべてに該当しそうな、そんな村山くんと彼女。
この二人の関係を知って誰もが思い、そして当然のように私も思ったこと。
『なぜ彼女なのか』
他の、女性の私から見ても魅力的な女子達ならまだしも、＊＊さんと一緒に、そして微笑んでいる村山くんを見ていると。気持ちがぐるぐるってしてもやもやっとしつつどよーんとなってしまうのです。

以上、回想終わり。
はて、なんでこんなに敬語だらけなんだろう？
まだ欠けた胸のピースが戻ってないのかな。

いろいろ間が悪かったんだろう、きっと。今日の私の運勢は大凶か大吉かの二つに一つ。
（私）部活大幅延長、眠気全開バスの中、ふと気付けば見慣れぬ車窓の景色、慌てて降りれば降車予定の停留所は遥か遠く。
（村山くん）彼女と遊ぶなり送るなりして、独り停留所にてバスを待つ。と私は考える。
状況は流れに流れ、現在村山くんと二人きり。バス停。割とシャレになってない。
さっきから心臓バクバク。胸はドキドキ。
まず暗いのがよくない。薄暗いじゃなくて、暗い。それから車通りの少なさも減点対象。これだから田舎は、て気になってしまう。
少しでも気を紛らわせようと、かなり無理をして村山くんに話しかけてみた。
お互いクラスメイト。特に身構える風でもなく、彼は気軽に私と会話を続けてくれた。
やっぱすっごくいい人だ。そしてかっこいい。
最近どう、とか勉強難しくなったね、とかの世間話をしながら、私はひとつ名言を思いついてしまった。
『その人を好きになるのに、恋人がいるかどうかは関係ない』
いい事考えたな、私。ひとつ大人への階段を上れた気がする。

こうやって、何気ない会話を続けていられるだけで幸せなんだ。心地良いんだ。
私は彼が好き。
彼が誰と付き合っていたって、彼自身が変わるわけじゃない。
和やかなムードに身を委ねて、このまま楽しい時間を過ごそう。それで別れ際にさりげなく「彼女さんと仲良くね」って言ってあげよう。そうすれば、すぐにじゃなくても、少しずつ少しずつこの胸の蟠（わだかま）りは薄れていってくれる。苦しくなくなる。そしていつかこの恋にちゃんと終止符が打てるようになるかもしれない。だから。
だから――
「こんなに遅くまでご苦労様です。彼女に連れ添うのは大変ですか？」
それは、不用意な一言だった。
穏やかな空気の中で弛緩しきっていたせいか。それとも心のどこかでこの話題に触れることを期待していたのか。
どちらにせよ、もう始まってしまった。
辺りの空気が一気に冷え込む錯覚。それは彼が私の言葉に反応して生じたものじゃない。私自身の雰囲気の変化を敏感に感じ取った彼と、ロクデナシの私により生まれ出たものだ。
彼は人の気持ちを酌もうと努める、できた人だ。

彼女と違って。
ゆっくりと、一語一語深慮するように言葉を選び、それを紡ぐ。
「うん、まぁ。でもたの」
「あの人以外の他の人じゃだめなんですか？」
質問をしているのに答えを求めない。彼女を許容する言葉なんか聞きたくない。
最低だ、私。
でも最低な私は止まらない。
「村山くんは素敵な人です。みんな言ってます」「少なくとも私達の学校に村山くんと付き合うのを躊躇う人なんていないと思います」「みんなの憧れなんです、あなたは」
「もっともっとふさわしい彼女さんがいるはずなんです」「なのに、なんであなたは、あなたは！」
矢継ぎ早に繰り出される言葉。
それらが私の口から発せられているのが、話している今このときでさえ信じられない。私は、
「落ち着いて。君が、君じゃないみたいだよ」
そう。私はこんなに早口で喋らない。自分の意見を言わない。引っ込み思案な人間だ。今までそうやって通してきたんだ。
だからこれまでの自分を壊さないように、今からでも自分の感情は隠して、穏便に、隠して、穏便に、隠して、
無理！
無理！
無理無理無理！
絶対、絶対、絶対に、無理っっ!!
このままいくしかないんだ。
このまま最悪の結末を迎えるまで、私という存在は止まれない。
心臓の鼓動を故意に止められないように、人が呼吸を止めて生きられないように、私という存在があり続けるためには、この、最期のわかりきった暴走に身を揺られ続けるしかないんだ。死ぬほど痛い思いをして、死を避けるしかないんだ。
気付けば、私は彼の胸の中にいた。
甘い気持ちなんて微塵も生まれやしない。
だって彼の腕に包まれているんじゃなくて、私が一方的に彼の肩に縋り付いているだけなのだから。
涙は出ていない。出ていないはずだ。
でも全身の震えが止まらない。座っているはずなのに、一瞬後には奈落の底へ堕ちていきそう。
怖い怖い怖い。
怖いのに。あぁ、怖いのに私は最期の扉を開けてしまう。暗闇に続くとわかっている、透明なガラスの、真っ黒な扉を。
「私じゃ、だめなんですか？」

闇。
静寂。
収束。
彼からの反応はない。

凝縮。
停滞。
固定。
彼からの反応はない

無。
夢。
闇。
彼からの反応――

――再動。

言葉はなかった。
ただ少し、私の左肩に彼の下顎が触れただけ。
そしてまた、彼の頭は元の位置に戻る。それで終わり。
でも私にはそれで十分だった。十分すぎるくらいだった。
あえて言葉にしない彼のやさしさが悔しい。私はこんなにも嫌な人間なのに。こんなクズに向けられるやさしさに、何で蒼穹のような澄んだ輝きがあるんだろう。
何だか、卑怯だ。
だから、その卑怯に少しでも報いてやりたくて、私は絶対に訊かないと決めていた質問をしてみた。
一つの恋の墓標に、一輪のカトレアがあってもいい。
「彼女の、どこが好きなんですか？」
彼の視線がこっちに向いたような気がした。でも彼の顔を仰ぎ見たりはしない。うまく笑顔をつくれない相貌は彼の胸の中に。
しばらくして、ぽつぽつと彼は話し始めた。

彼を乗せたバスが見えなくなったところで、私はようやくひと心地つけた。と言っても、もちろん胸の中のあれこれが、すっきり綺麗に片付いたというわけでもないけれど。
顔を頭上に向ける。
今夜の空には雲が一つもなかった。

かの行為の魅力は二つあるらしい。
一つ目は星座の捉え方は様々だということ。もちろんある程度決められた捉え方を子どもの頃に教えられたりもするだろう。しかし、それはあくまで星の見方のひと

つに過ぎない。夜空の星砂を使って描く絵には、まさしく星の数ほどの自由が許されている。そして、星の価値は作られる星座の美しさで決まり、また逆に各々巡らせた星座の美しさが、仄かな星に新たな価値を与えるのだろう。

二つ目。それは光を生むものとそれを受け取るものとの距離の遠さ、長さ、尊さ。決して手が届かないからこそ、人々は太古の昔からそれを求め続けてきた。そしていつしか気付くようになる。あれは届かないからこそ恋い慕われるものなのだと。自分とは遠く、離れていればいるほど、その輝きに魅せられていくのだと。彼のものが自分から遠い存在であればあるほど、近づくこともできない遥か此方からずっと見守っていたい。

つまりは、そういうことらしかった。